

龍樹の第十八願の見解

藤 井 瑞 弘

法然上人が、オ十八願を以つて王本願と称され、又生因本願とも云われる無量壽經オ十八願こそ、淨土教の中樞をなすものであり、その中に含まれる念仏こそ、衆生救済に對する弥陀の本願であり、衆生に取つては唯一の行であるか、淨土教史上最初の祖と見られる龍樹菩薩に於いて、どのように見られてきたかに就いて、龍樹の弥陀教義の纏まつたものは、十住毘婆沙論易行品でみなければならぬ。先ず初めに易行品弥陀章の中に、「阿弥陀佛本願如是若く念我名自皈即入必定得阿耨多羅三藐三菩提」と言ふのは、弥陀の四十八願についてみれば、オ十八願に當るものである。この中、念我と言ふのは阿弥陀仏の名号を称することを云い、念我名は衆生の起行で、自歸は衆生の安心して行を起すものは、必定に入つて阿耨多羅三藐三菩提を得るのである。龍樹の當時には阿弥陀仏の本願の数も四十八願と一定して居らず、望月居士によれば、二十四願經が行なわれていた程度で、龍樹の「阿弥陀本願如是」と云ふ意訳文こそ、これにあてはまる願文を拾出すれば、初に平等覺經二十四願の中、オ十八願に「我作仏時諸仏國人民有作菩薩道者常念我淨潔心壽終時我不可計比丘衆飛行迎之共在前立即遷生我國作阿

唯越致不用者不作仏」とあり、又大宝積經四十八願の中、才十八願に「若我證得無上覺時余仏刹中諸有情讚用我名已所有已根心迴向願生我國乃至十念若不生不取菩提唯除告無阿惡業誹謗正法及諸聖人」とある。これからみれば、竜樹は平等覺經二十四願中、第十八願を見られて意訳されたものとも考へられる。又平等覺經中十七願、大衆悲芬陀利經中、四十二願、悲華經中、四十二願、慈文無量壽經中、十九願等、無量壽經下卷の十八願成就文と相照すれば、無量壽經十八願を指すものと見る事が出来よう。

十住毘婆沙論には菩薩が、阿惟越致即ち初地の不退転に到る道として難行、易行の二道を示し、陸路の歩行と水路の架船とを以て、これを明している。この易行品には即ち易行道を説示し、不退の行として株名を説いている。株名は何を株するかに就いて竜樹は、阿沘陀仏世自在王仏の一百七仏菩薩等の名を株すれば、十方十仏を株すると同じく、亦速やかに不退に到る事が出来ると言われたのである。然るにその中、世自在王仏等に就いては、易行品に於ては何等説明が付いておらず、阿沘陀仏に就いては、其の本願（阿沘陀仏本願如是云々）をあげ、又別に三十二行の偈を作つて讃歎されている所からみれば、竜樹は阿沘陀仏を重視された事が窺われる。

沘陀章は大別して四つに分類される。初に現法身の徳を明し、二に現衆生の徳を明し、三に攝淨土の徳を明し、四に発願廻向を明すのである。才二の現衆生の徳を明すは、才四頌即ち、

「人能今是仏——中略——是致我常念」

は、大經十八願成就文の意を述べられたものと理解され、沘陀の本願に誓われた行は、沘陀株名であると見込まれた事がわかる。竜樹はその本願を意訳された文に於いて特に、株名につい

てその重宝を置き、阿弥陀仏の名を称すれば、十方十仏を称すると同じく、速やかに不退に入る事が出来ると云われたいのである。こゝに意樹は弥陀の本願に誓われた行は、称名であると見込まれ、称名と弥陀の本願とを重ねられた事が窺われる。